第1編 中東のバナキュラーな都市住居、ジェッダ

旧市街地は小高い丘の上。過去の建物の瓦礫でできた丘である。一帯をしばらく歩き回れば、そのことが理解される。日干し煉瓦を積み上げただけの、しかし思いの外高層の建築群は、一階を商いに開放もできる都市住居、ショップハウスの典型だ。

よくよく眺めてみると、キュービックな小部屋を積み上げただけの単純な四角いマッス。その表層に、必要なだけの孔が穿たれ、その周りに19世紀オスマントルコの形跡が、建築の装飾ディテールが踊る。森のない乾いた砂漠や土漠の風土では、限られた長さの材木しか手に入らなかった。それが部屋の大きさを決め、さらにその一端はファサードから突き出て、そこにグラフィックな影を落とす。どこまでも蒼い空と接する建物の輪郭あたりでは、漆喰の白っぽい残滓に強烈な陽光がはじける。

そして、各戸の開口を垂直方向につなぐベイウインドウ。気候風土と宗教の教えが、閉じて開ける絶妙な仕掛けを開発した。角度の調整できるガラリが、上下に、前後に滑る。そこから招じ入れられた風は、天空を覗く中央のアトリウムに抜ける。室内環境を巧みに制御する建築の仕掛けは過酷な外部にもその姿を現し、太陽の動きに従って密やかな陰影を伴い様々な表情を見せる。

イスラムの聖地メッカやメジナに向かう紅海沿岸のゲートタウン、ジェッダ[*1]の一角は、

*1
Jeddah, Saudi Arabia 紅海沿岸の最大都市

かつてこのような都市住宅群で見事に彩られていた。何年たってもその中に立ち尽くした時のことを忘れることはない。風土の生んだ住まいの立面が作り出す不整形な街路の圧倒的な体験は、光と影、熱と影、埃と臭い、視線と音などに増幅されて、今も生々しい体験として脳裏に蘇る。

しかし、長く巡礼の港町に息づいてきたこのしたたかなジェッダのまちなみも、20世紀後半以降の際限のない急速な開発の圧力の前には無力であった。そのプロセスの果てに手にした私たちの現代の都市空間は、次の時代に果たしてどのような記憶を残すことができるのだろうか。

写真01-1 ジェッダの集合民家